

上に変わると、共生社会の矛盾が明白にあらわれてくる。「町長の交代だけで、行政主導の共生は大きな方向転換をする」(同、二四九頁)「地方参政権を持たないブラジル人にとって、そこで生活しつつも、自らの条件を良くすることを政治的にかなえることはできない」(同)。彼らは、祖国日本に憧れと経済的発展の恩恵を求めて移住してきた。しかし、今日の世界的不況下で、彼らは派遣切や雇い止めにあい厳しい状況にある。大泉町の食堂経営者は、昨年秋リーマンショック後から売り上げが半分になったと言っている。また「上毛新聞」九月三日の記事では、大泉の南米系外国人事業所で六月二十五・二十六日実施のアンケートの結果、七割が「経営悪化」と報じている。ブラジル人学校は学校としてみなされていないので、補助金の対象とならない。かくして児童・生徒の不就学児の増加となる。「毎日新聞」七月二十五日の「新教育の森」は町内のブラジル人学校「日伯学園」を次のように記している

二〇〇人以上いた生徒が、今年に入ってから急激に減り始め、今は八〇人になった。学校をやめた生徒のうち、三割がブラジルへ帰国。同じく三割は日本の公立校へ転校し、残りは不就学という。戸澤江梨香園長(四三)は「公立学校と違って、ここは日系人のアイデンティティーを保つために重要。学校に來られなくなった子にたまに会うと、どんどん表情が暗くなり、大人の顔を見なくなっている。非常に心配だ」と話す。

保護者の雇用問題は、児童・生徒にとって教育問題となり社会的にも深刻である。

「大泉祭り(サンバ)」町役場では例年より寄付金も少なく、催し物も少ないとのことであった。しかし陽気で楽天的なラテンアメリカからのニューカマーの人々は、不況の中でも明るかった。お祭りでは、ブラジルの食べ物や飲み物が売られ、リズムの効いた音楽が流れ活気があり、人々の出会いと再生、連帯と相互扶助、情報交換がなされていた。お祭りによって共同体が再生され、新しい共同体の生命が創り出されている。大泉祭り(サンバ)はカトリック・キリスト教の文化的表現であり、日系ブラジル人の市民宗教としての存在の表現である。サンバはブラジル人の文化的シンボルであり、さらに他の宗教文化との対話がなされている。大泉では、大泉祭りが中心となって多文化共同体を形成している。大泉のニューカマーたちは失業者を助け合い困難を乗り越えて生きている。それでも最近では、以前より仕事が入るようになってきたとのことである。ニューカマーの逞しいパワーと連帯を大泉祭りの中に見出した。

宗教間対話を支えるものとしての求道性

——東西霊性交流の場合——

峯岸 正典

本論では、一九七九年から今日まで三十年以上にわたって禅とカトリックの間の東西霊性交流が続くその要因を検討する。交通通信手段の発達、他の伝統に関する情報量の増加、それに

第16部会

ともなう関心の広がり、深化という時代性の中で、第二バチカン公会議（一九六二―六五）から、他宗教に「真理の光線」を認める態度がカトリック教会に生まれたことが交流の前提になる。くわえて禅とカトリックとの間において、特に教義面での際だった対立関係がなく、集団、共同で修行、修道生活をするといった類似性が交流を容易にした。継続の大きな基盤となっているのはカトリック側の熱心な働きかけである。これはヨーロッパにおける禅への関心、坐禅への傾倒の反映であり、身体性を重視する伝統への着目と言える。カトリックの修道生活が目指しているものは「自己の内奥に沈潜する霊的生活の深まり」（トニーニ大修道院長）であるので、禅に関心が向けられた。日本の禅には、祖風、古風を慕うという原点回帰的な指向性が強くあり、禅僧の理想と重なる従順、清貧、貞潔といった徳目を修道士が守っていることや、聖ベネディクトの伝統における定住という徳目が死ぬまで修行道場を離れないという不離叢林（道元「辨道法」）の規範と響きあうことから、いにしへの禅の理想がヨーロッパの修道院に生きているということ、並びに終生誓願という宗教的共同体の中で自己を捧げる生き方への共感、これらのことがカトリックの要請を日本の禅が受け入れてきた背景にあると言えよう。

さらなる要因として、毎年二月における一月間の宝積玄承老師によるヨーロッパ移動摂心がある。カトリック側が全て準備手配して行われるもので、ベルギー、オランダ、フランス、イタリアといった各地において各修道院を巡回指導する。第二回東西霊性交流（一九八三）のとき、岡山県の曹源寺における僧

堂生活のオリエンテーションで「禅の原則を保持しながら修道士に対して最大限の配慮をした」ということから宝積師への評価が定まり、翌一九八四年より休みなく行われているこの指導では「クリスチャンとしての境涯を深めるための禅」が目指され、八年に一度しか来日できないカトリック修道士の禅への傾倒を支えている。またローマ裏千家出張所長の野尻命子氏はヨーロッパの諸言語に通じ、ローマ在住ということからバチカンの高位聖職者とも交流が深く、同時に日本の禅の指導者とも昵懇であったので、双方の意思疎通を円滑にした。霊性交流を推進する立場にあったベネディクト会士の中には、野尻氏の茶道の弟子たちが含まれ、野尻氏は日欧双方の橋渡し役を担っていた。

禅への関心を持続させる契機として宝積師、野尻氏らの努力があると同時に、異なった伝統に開かれた態度を示すことのできた修道院の存在があったが、参加者が長年の修行、修道生活において培った柔軟心、忍耐力を持っていたので、他の宗教的伝統、宗教的価値への理解が早く、訪問先の宗教共同体の生活を乱さなかつたことも交流の継続に常に資している。こうした個々の努力を支え、対話を継続させる力が生まれてくる根源的な地平は対話を通じて他に学び自己を深めていきたいという求道性であり、その求道性がスピリチュアリティへの傾きとなっている。言い換えれば、求道性とは自己の中に欠けているものがあることへの自覚であり、それを埋め合わせようとする努力でもある。もちろん宗教間対話とは異なった求道の生き方もあり、東西霊性交流はそうした広い求道性の中の一環となる。

つまり、それぞれ文化的完結性を持つている宗教的伝統の中で、元々は自分たちの伝統の中にあつて現在見失いがちになっているものへの希求が東西霊性交流の根底にあり、それが継続の力となつていふと考えられる。

二一世紀宗教間対話の潮流

——各対話指針の比較から——

山 梨 有 希 子

一 はじめに—Truth から Common valuesへ—

近年の宗教間対話は、互いの教理上の対立を問題にしていた対話から、「グローバリティ」の意識に基づいた社会にむけてどういった行動がとられるべきか、また、それにむけてどう協力していくべきかを話しあうものにシフトしつつある。これはそれまでの宗教間対話がいわゆる宗教的エリートによる神学的論争に終始することが多かったことによる宗教間対話の不毛性をもたらした結果でもある。しかし私たちはその流れがここ数年の間に、また変化を見せ始めているのを目撃している。本発表では、その変化を追うとともに、そこから見えてくる「宗教間対話」の新しい課題を明らかにすることを目的としている。

二 Common values から共同体内部のつながりへ

たしかに「世界平和」などの共通善を前にして諸宗教・諸文化の間に対立は起きないであろう。しかし、それはまたあまりに大きく、漠然とした概念であるがゆえに、個々の戦争や日々

起きる隣人トラブルなどへの応用性を欠くものであった。「世界平和」といった抽象的問題ではなく、従兄弟が異宗教の人と結婚した、隣人で友人でもある異宗教徒の葬式に行きたい、異宗教徒のお祭りに呼ばれた、などの具体的かつ個別的な問題として宗教間対話は問題となつていふのである。

それに答えるように、二〇〇七年にキリスト者統一委員会とアイルランド教会が出した「宗教間対話および行事に関するガイドライン」は個別の事項に関してかなり具体的な内容となつている。

また、二〇〇六年にヨーロッパ会議がフランスにて開催した会議では、ローカルレベルで行われる宗教・文化間対話における十二の原理（地方行政当局のための）なるものが明らかにされた。

これらの対話ガイドラインから伺えるのは、宗教間対話がローカルなレベルあるいは草の根レベルで広く行われるようになったということ。そして、その内容は「世界平和」のような共通善から、俗なる共同体における平等、安心における日々の暮らしのためのものに、そして、それらはグローバリティの意識に基づくというよりも、ローカルな共同体を構成する一人としてのアイデンティティを認識する（させる）という側面がより強くなつてきているということである。

三 宗教間対話の新しい類型—Citizen dialogue between persons of different faiths

ヨーロッパ会議は、宗教間対話には次の三つの意味があるという。「Interfaith dialogue」「Citizen dialogue between per-